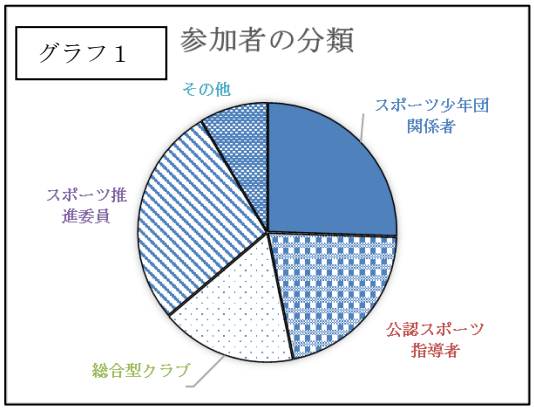
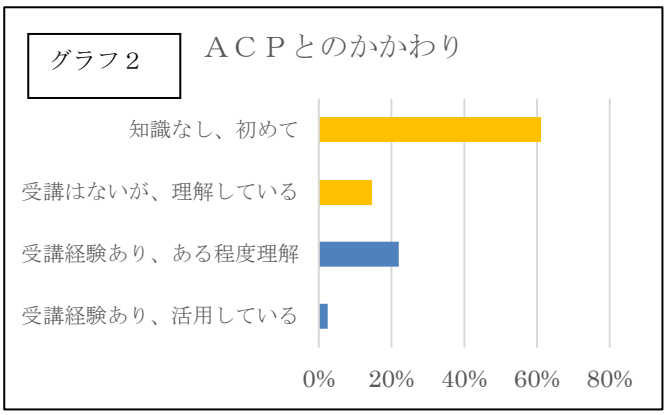
令和５年度　第１回地域スポーツ指導者養成研修会
（ＡＣＰ普及講習会：公認スポーツ指導者更新研修会）の報告

６月１７日（土）、下松市トラックワンアリーナ（下松スポーツ公園体育館）において、４９人の受講者に、ＡＣＰの理論や実技を学んでいただきました。講師は、これまでと同様、東京学芸大学の佐藤善人教授とＪＳＰＯスポーツ科学研究室の青野博室長代理のお二人をお迎えすることができました。この研修会は、ＪＳＰＯ公認スポーツ指導者更新研修を兼ねて行いましたので、右のグラフのような参加傾向が見られました。スポーツ推進委員の皆さまにも参加いただき、有意義な時間を持つことができました。



右のグラフ２のように、受講者の６割は、ＡＣＰを初めて学ぶと回答していますが、２割強の受講者が学び直しで参加しており、関心度の高さを感じました。



情報提供　**ジュニア期のスポーツと指導者役割**

初めに、本研修担当の和田から、「スポーツ少年団の手引き」を参考に、スポーツ少年団の６つのQuestionを使って、セルフチェックの時間を設けました。ガバナンスコードを尊重することや子どもを中心に置いた指導をすることなどの基本的な内容でしたが、定期的に自己を振り返ることは、学び続ける指導者としては必要なことではとの思いからです。加えて、これからの、「ジュニア・ユーススポーツクラブ」構想について、日本スポーツ少年団が示された構造図を紹介いたしました。

理　論

初めに、ＪＳＰＯ-ＡＣＰは、ガイドブックのすべてを通した一連の指導法のことであることを再度強調されて、子どもの発育・発達の特性を中心に、青野先生がＡＣＰの理論を話されました。

ＡＣＰを進めていく指導者の役割として、

楽しく夢中になって遊ぶ環境をつくる
環境を通じて洗練された動きを引き出す

という観点をもち、そのためには、

効果が期待できる動きの要素
遊んでいる子どもの動きの観察
場の構成やルールを柔軟にアレンジ

この３点が重要であり、例を挙げながら、お話されました。スポーツ活動の入り口にいる子どもたちが、しっかりと体を動かし、多様な動きの経験によって、動きを洗練化させるとともに、運動有能感を感じることができるようにすることが私たちジュニア期のスポーツ指導者の役割と言えます。受講された多くの皆さんが、生涯スポーツの基礎を確かに培う指導者でありたいとの思いを強くされたのではないでしょうか。

★参加者の感想から★
〇幼稚園児がいるため、楽しませながら活動するための参考になった。
〇よく理解できた。指導者が楽しむことが必要だと痛感した。
〇イベントの導入に活用したい。
〇子どもにとって良い成長につながると感じた。

実　技

△進化ジャンケン

実技のスタートでは、佐藤先生から、アイスブレーキングとして、「お料理作り」「進化ジャンケン」を紹介されました。「進化ジャンケン」では、ヘビからスタートして、ジャンケンに勝つごとにゴリラや人間に進化し、神様を目指すといういつものパターンから始めました。そうすると、神様になれない人がわずかに残ってしまいます。そこで、ジャンケンに負けると、いきなりヘビに戻るというルールに変えて「進化ジャンケン」が始まりました。このルール変更は、先ほどとは逆に、簡単には神様になれない状況となり、活動量が増加し、息を切らせながらも楽しく取り組みました。また、新聞紙を使って、「新聞紙なりきり」や「爆弾ゲーム」をしました。

「爆弾ゲーム」は、後ろのラインを決めておき、そこに入った新聞紙ボールを触れないようにするなど、ねらいによって、次々に条件を加えていくアレンジの楽しさを説明されながら、受講者に体験していただきました。

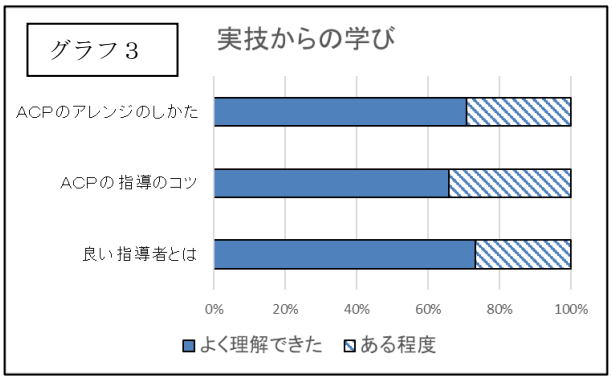
後半は、鬼遊びとして、「ねずみ逃がし」を紹介されました。かなりハードな動きになりましたが、年齢を忘れ、夢中になって何度も遊んでいる姿が印象的でした。この遊びが、「ことろことろ」「ムカデドッジボール」に変化していき、単純な動きから、少しずつ洗練された動きになってくることを実感できたようです。

△　ねずみ逃がし

△　「ことろことろ」のアレンジを

★受講者の感想から★

- ○スポ少でも活かしたい。
- ○キッズ世代を大切に育てたい。児童の活動に活用したい。
- ○自分の団のコーチにも学ばせたい。
- ○改めて運動遊びの楽しさを体感できた。これからも子どもたちの笑顔のために。指導者としても楽しめた。
- ○実技がテンポよく無駄なく流れていた。実践に役立つ内容だった。

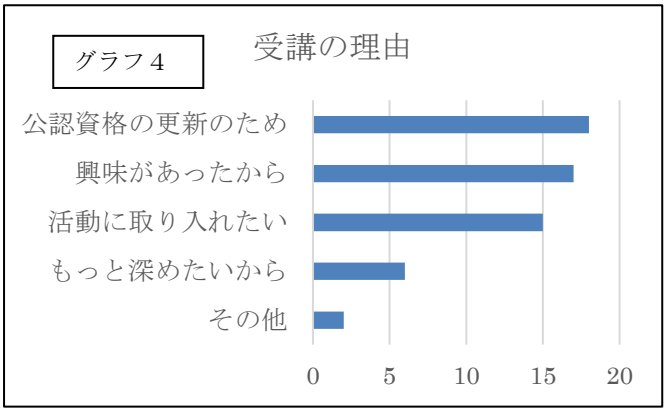


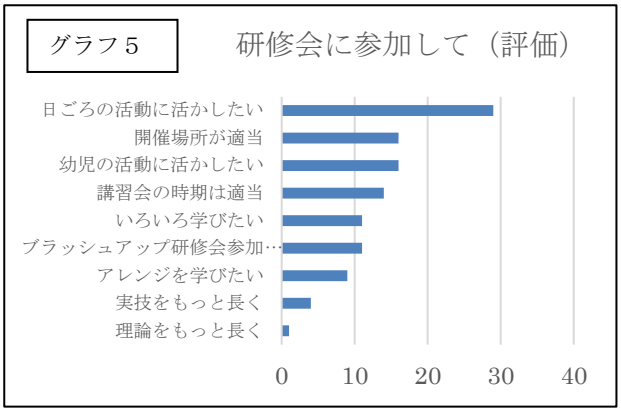
受講者のアンケートでは、「実技からの学び」について、７割の受講者が、よく理解できたと回答しており、ACP の指導のコツについては、これからいろいろな対象者に対して実践していくことで、次第に身についていくものであり、地域やクラブ・単位団の中での展開に期待したいものです。

講習会を終えて

今年度は、周南地域で開催しましたが、これまで以上の参加があり、受講者の熱意を感じ取ることができました。１２月にＡＣＰブラッシュアップ研修会を予定していますが、１０人を超える受講希望者がすでにありました。この度は、受講理由として、公認スポーツ指導者更新の目的もありましたが、グラフ５でも言えるように、日ごろの活動に活かしたいとの評価をいただきました。その他の評価も大変参考になりました。

△　「ことろことろ」から「ムカデドッジボール」に



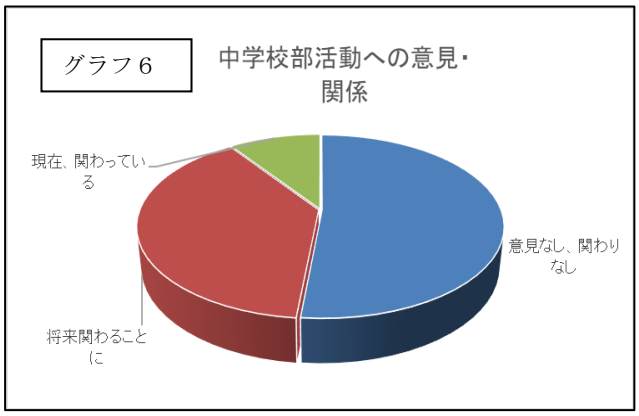


中学校部活動への意見・関係

この度のアンケートでは、中学校部活動の地域移行についての質問をしました。

選択回答は、**「①意見なし、関わりなし」、「②将来関わることになる」、「③現在、関わっている」**の３つとしました。その結果、半数は部活動の地域移行に対して、意見も関わりもありませんが、すでに関わっている人を含めて、半数は中学校部活動との関わりあるという状況が見えてきました。

このような立場にある皆様から、部活動の地域移行に対しての意見を次のようにいただきました。



〇親の負担、他チームとの力の差
〇地域のクラブを中学校教員が運営している。
　現役選手がコーチをやらざるを得なくなった。
　営利団体化するクラブが出てくる。
〇登録するにあたり、指導者の選考が課題。場所の確保。
〇クラブが乱立して、会場の確保が難しくなった。
　エリートを育てるクラブはできたが、初心者の中高生を指導するクラブをだれも作ろうとしない。
〇指導者不足　学校との連携
〇トレーニングの場所、活動費
〇指導者不足　専門家が少ない。
〇時間がない、学校が使えない場合の場所の確保が難しい、妥当な月謝が不明
〇財源、コーディネーター、情報交換、周知
〇活動場所、活動費、指導者の確保
〇施設の不足
〇財源不足、安全面・責任面が不明確、長期に渡って続けられるのか。
〇小学生は全く知らないと思う　明確な説明がない。
〇子どもを送迎する親の負担
〇受け皿になるクラブが少ない　指導者不足
〇少子化の問題、財政、合同チームでもチームワークがとれるのか。
〇受け皿が少ない、費用がかかる、指導者の責任が明確ではない。

（文責：山口県スポーツ協会地域スポーツグループ）